

知的障害のある生徒に対する朝の準備行動への介入

—行動コンサルテーション (behavioral consultation) に基づいた親支援からのアプローチ—
Intervention to preparation behavior of morning for student with mental retardations

○ *神山 努 **大久保賢一 **野呂文行

Tsutomu KAMIYAMA, Kenichi OHKUBO, and Fumiyuki NORO

(**筑波大学教育研究科) (**筑波大学人間総合科学研究科)

Master's Program in Education, University of Tsukuba. Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

Key words: 親支援、知的障害、行動コンサルテーション

I. 目的

近年、行動コンサルテーションに基づいての学校・家庭支援が広く実施され始めてきた (加藤・大石, 2004)。

本研究では知的障害生徒1名に対して、家庭での朝の準備行動の自発について、コンサルテーションに基づいた親支援プログラムにより介入することを目的とした。

II. 方法

1. 対象 本研究開始時の生活年齢16歳9ヶ月であった知的障害のある男子生徒1名を対象とした。養護学校高等部に在籍しており、有意味な発語はなく、言語指示の理解は比較的良好であった。

2. コンサルテーション手続き 介入は原則家庭で母親が行い、結果を支援者が作成したチェックリストに記録することを依頼した。結果はその後、週1回のA大学の教育相談場面へ母親に持参してもらい、支援者がフィードバックを提示し介入の改善・修正を行った。なお、1週間の記録日数については無理ない日数を行えばいいとし、特に指定はしなかった。

1) 問題の同定 母親と対象者の目標設定に関して話し合った。その結果、対象者が高校生と年齢が高いこと、家庭での自発的行動が不足していたことなどから、日常生活スキルの自発的遂行を標的とした。

次に、対象者の1週間のスケジュール調査として生態学的アセスメントを母親に依頼した。明らかになった1週間の活動を、対象者が自発的に行う活動、指示があるという活動に分類し、標的場面について母親と話し合った。以上の調査および家族の介入実行可能性から、朝の準備行動の自発的遂行を標的とした。また、対象者の好みに関して母親にインタビューを行った。

2) 問題の分析: ベースライン 準備行動を課題分析した各単位行動で、10秒待っても自発しなければ言語指示を行い、それでも遂行できなければ直接援助を行うこととした。以上の条件で1週間の記録収集後、記録結果に関して母親へのインタビューによる分析を行った。その結果、先行条件として、母親への言語指示があれば各単位行動の遂行はほぼ可能であり、居間でテレビを見ていると始発が困難とことだった。また、準備行動完遂後に特に強化子は設定

されてなかった。

3) 介入の実施: 写真スケジュール・結果操作条件 全課題提示法により介入を行った。各単位行動を記述した写真カードを導入した。行動の始発時には母親が1番最初のカードを指差して「これをしてください」と教示した。カードに示された行動を行うことができたなら、次のカードを参照するように促した。誤反応・無反応にはベースラインと同様のプロンプト手続きを行った。また、準備行動を完遂したら、対象者が好きなDVDを見てもよいこととした。

以上を介入手続きとして、介入導入時に母親に書面を用いて教示し、スケジュールの使用方法に関しては相談場面でモデルを提示した。

4) 写真スケジュール撤去条件 写真スケジュールを撤去した条件で行った。

5) フォローアップ 介入終了から約2ヵ月後のデータを収集した。

III. 結果

Fig 1に朝の準備行動の正反応率を示した。データ収集方法は、母親に各単位行動を自発的遂行・言語指示・直接援助 (ガイダンス) のいずれかでチェックリストに記録してもらい、その結果からのものである。

ベースラインの正反応率は低率だった。写真スケジュール・結果操作条件で正反応率が上昇し、夏休みや休日には低下したが、それ以外は比較的安定した正反応率を示した。スケジュール撤去条件ではわずかに下降が見られたが、再び導入すると高い正反応を示すことができた。また、フォローアップでも正反応率に維持が見られた。

IV. 考察

本研究の結果から、コンサルテーションから導き出された写真スケジュールと結果操作による朝の準備行動への介入は有効であったことが示された。母親のチェックリストに基づいて対象者の行動を分析することで、適切なプログラムを作成することができたと考えられる。

V. 引用文献

加藤・大石 (2004) 特別支援教育を支える行動コンサルテーション 連携と協働を実現するためのシステムと技法。学苑社

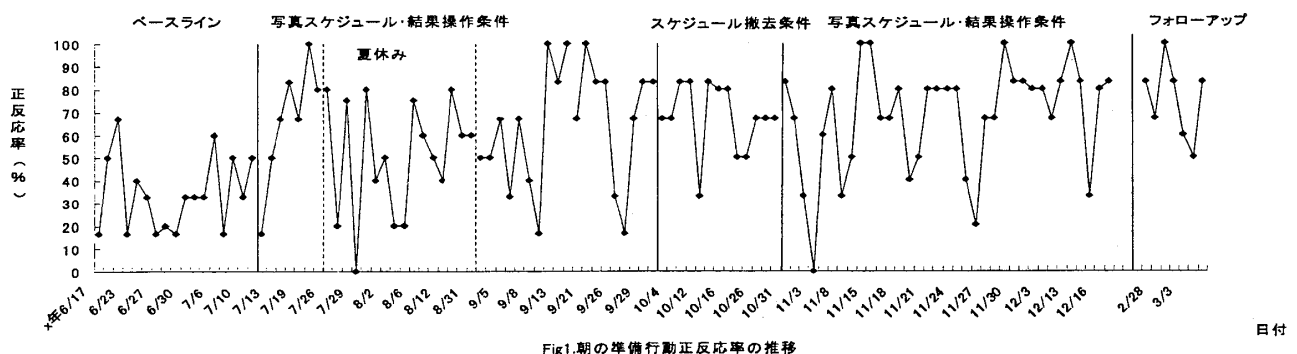


Fig1.朝の準備行動正反応率の推移